



ちょっとそこまで ～お散歩日和 (名言編)～



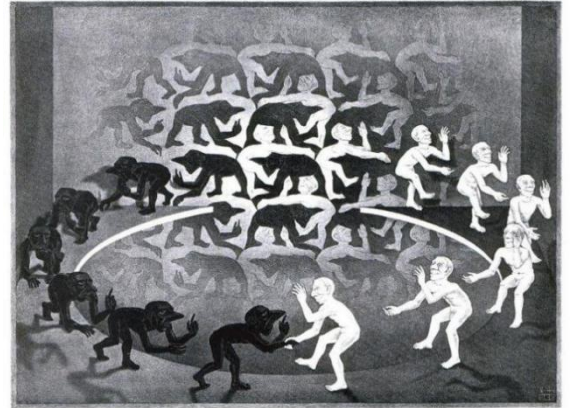
ダイヤモンドの行商人が… 甲本ヒロト



ダイヤモンドの行商人がやってきて、
このダイヤモンドは永遠の輝きをどうのこうの言うけれど、
せいぜい百年しか生きられん人間に、永遠の輝きを売りつけてどうするんじゃ。
俺らが欲しいのは今だけです。 …… 甲本ヒロト (ブルーハーツ)

エッシャーの作品に「出会い」というのがあります。

まず1枚の絵があって、向かって左を向いている白い人物と、右を向いている黒い人物がジグソーパズルのようにはめ込まれ平面を埋め尽くしています。当然ながら、この絵の中での2人は隣どうしピッタリと接し合っていない、握手できるような構図にはなっていません。というより、この平面上のあらゆる場所で、白黒2つのキャラはすれ違いをくり返しており、そのすれ違いは、どこまでも続いているように見えます。

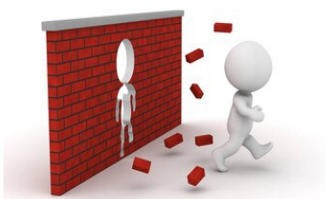


しかし、その2つのキャラが突然、2次元世界から3次元へと移行し始め、最後には白い人物と黒い人物の2人を握手させるのですから恐れ入ります。作品では、初めの平面世界は、画面の奥の方に置かれており、その前に丸く繰り返された池みたいのものがあって、白黒それぞれがその円周を回るようにして移動し画面の一番手前のところで、「出会い」を演出されているのです。

しかも、黒い人物は妖怪のようでもあります。見ようによっては、人間のダークな部分を映し出しているとも言え、そこでの握手が何を意味しているか、深く考えさせられます。こうした出会いの対比が生み出す寓意は、エッシャーの魔力であり、大きな魅力と言えるでしょう。

いきなり訳のわからない話で始まり恐縮です。なぜこんなことを書いたのかと言いますと、私自身の経験から、世の中には変わるものも多いいけれど、その一方、変わらないものも少なくないとの実感をもっているからです。

そこで、その変わらないものと思うものの中から「自ら枠を作らない」という点を取り上げてみます。



枠は作るものではなく、結果としてできるものです。自分で自分の容量や可能性・将来像を勝手に決めると、それ以上は自分の能力を発揮できません。高い目標を先ず設定して、それを達成するために、自分にできる全ての努力をそこに集中することが肝要です。

人の人生は、自分で制限や限界を作ってしまうと、その枠の中で生きていくことは、比較的簡単なことであり、どうしても逃げのスタンスに陥りがちです。言い訳を用意できると言えば分かりやすいでしょうか。「自分は〇〇な人間だから。」「〇〇な性格だから。」「不器用で〇〇しかできないから。」・・・

もちろん、それでも十分、満足して生きてはいけるとは思いますが、少なくとも私好みではありません。もっと自分の幅を広げることができそうな気がしますし、自分の人生をよりドラマティックに自ら演出したいという欲望にも満ちているからです。

その意味からも、「出会い」を大切に作る人間であり続けたいとの願いがあります。エッシャーの「出

会い」を持ち出した理由がここにあります。

人生は出会いに尽きます。何故なら、「人生の扉は他人が開く」からです。どの出会いが自分にとって大切かは、その時は分かりません。だからこそ、一つ一つの出会いに真摯に向き合うことが大切です。出会いは自分を成長させ、そして、人生を豊かにしてくれます。ましてや出会いに「運命的な出会い」などというものはありません。その後、お互いが相手に信頼と敬意をもって接し続ける、長い日々の営みの積み重ねの中で「運命的な出会い」へと昇華していくのです。絆を深め、その結果として「掛け替えのない友や恩師」が作られていくのです。

もちろん、その「出会い」とは人との邂逅だけを意味していません。これに関連して、とても有名な逸話があります。

スティーブ・ジョブズの大学での講演「connecting the dots」、すなわち「点と点をつなぐ」という話です。彼は、大学を半年で退学、その後、モグリで聴講したのがカリグラフィー、装飾文字の一種ですが、彼はこれをほぼマスターしました。その10年後、「マッキントッシュ」を開発する時、カリグラフィーの技術が取り込まれ、完成したのが美しいフォント機能を備えた世界初のPCでした。

「カリグラフィーという学問の点」と「マッキントッシュPCという点」が繋がったのです。ジョブズが回顧します。

「大学にいた頃は点と点を先まで読んで繋げてみることは考えてもみなかった。しかし、10年後振り返ってみると、あの点とあの点が結び付いたと、はっきり分かった。」

学問とはそういうものでしょう。学んでいる時は、全てがばらばらでどういう意味があるのか、何の役に立つのか見えてきません。でも、将来それが何らかの形で必ず繋がっていくのです。



そうした点が繋がって、いずれは確かな道となることを信じて、「自らに枠を作らない」ように生きていきたいと思うのです。

このことは、哲学者九鬼周造が「遇(あ)うて空しく過ぐる勿(なか)れ」という有名な言葉を残していますが、同義でしょう。これは、同じく哲学者の鷺田修一氏の解説によると、

「偶然とは、偶々(たまたま)「あった」が「ない」こともありえたということ。この〈私〉も両親の偶々の結ばれから生まれた。そのかぎり(私)が今ここにこうしてあることに最終的な根拠はない。が、この偶然は人生を最後まで制約する。そう、偶然は必然へと裏返る。〈私〉の存在が意味をもつのは、この裏返りに孕(はら)まれた可能性を生き抜く時だけだ。」

となります。「偶然は必然へと裏返る」とは実に小気味よい言葉です。どこかで蘊蓄を垂れるのに絶妙なネタになりそうな気がします。

最後に、今から10年ほど前に大ヒットした韓国ドラマ「学校2013」の中で何度も挿入されたことで一気に有名になった詩を紹介します。それにより、邦題も「ゆれながら咲く花」になりました。

ゆれずに咲く花がどこにあろうか
この世のどんな美しい花も
すべてゆれながら咲いたのだ
ゆれながら真っ直ぐに茎を伸ばしたのだ
ゆれずに進む愛がどこにあろうか

濡れずに咲く花がどこにあろうか
この世のどんな輝く花も
すべて濡れながら咲いたのだ
雨風にさらされながらも花は開いたのだ
濡れずに歩む人生がどこにあろうか

(都 鍾煥：ト・ジョンファン)